
ココロノヤミヲトカスヒト

竹野千代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ココロノヤミヲトカスヒト

【Nコード】

N6495Y

【作者名】

竹野千代

【あらすじ】

夜は俺にとつて、底のない地獄だった。高原に出逢う迄は。生徒会の書記兼図書委員の人気者。そんな高原に誘われ図書委員になり、持っていなかった携帯でメールのやり取りをする内に……俺の心を蝕む闇は、少しづつ溶かされていくのだった。

一（前書き）

出来れば沢山の方に読んで頂き、冷静で的確な感想を頂きたいので、
よろしくお願い致します。

—

夜の闇に、墜ちていく。

夜は俺にとって、底のない地獄だ。

人間としての尊厳を奪われ、

信じてきたものや縋るものを踏みにじられ、

獣の様に地を這わされる。

夜の深淵に足を掴まれ、引きずり込まれて――

俺の一部が、また死んでいく。

心が、欠ける……

やっと死んでくれた。まさか誰かの死を喜ぶ事になるなんて、親が知ったらビンタどころの話じゃないだろうけど。

だけど、ようやく解放された、という安堵は嬉しさをしか俺に抱かせない。俺がどんな目に遭ってきたのか、話してやれでもしたらきっと、同情の後に、「そりゃ仕方ないな」と誰もが思うに違いない。

――やっと死んでくれた。その事実を、俺は一人噛み締める。もう怯えずに済む。急に乱暴にドアが開けられる事も、頬をはたかれ床に引き倒されのしかかられる事も、激痛の屈辱に歯を食いしばる

事ももうないのだ。

もう、誰かに支配される事もないのだから。

平和な毎日。だけど暗く引き籠もってしまっていた期間は長く、以前の様な明るさで皆と向き合う事は出来なくなっていた。

極度の人間不信。裏切りを経験すると、人を信じられなくなるもんだろう？ それだ。

好きな人でも見付けたら、心は癒されるのだろうか。傷付いた心が元に戻る事など、あるのだろうか……？

「橘！」

呼び止められ、足を止める。名前を呼ばれていながら自分から振り向く事は出来ず、俺は声の主が近付き、自分の体の前に回り込んできたのを俯いて見ていた。

今図書室で近くに居た高原が、立っていた。何か用、などと気易く尋ねる事など出来やしない、俺は隠せない警戒に身を硬くしたまま、窺う様に相手を僅かに視界に入れるだけだ。

……背、高いよなこいつ。殴られたら上からの体重が載って、かなり痛いだろうな。

息を整えて相手が喋れない少しの間にも、卑屈な想像が頭を占める。馬鹿か俺、と目線を反らした時にようやく、相手は口を開いた。「橘さ、本好きだろ。図書委員にならない？」

——突然、こういうお誘いだ？ ぽかんとして、俺は視線を目の前のメガネ君に戻した。

名を高原正直たかはら まさなおと言う。ちょいちょい同じ棚の似た様な本を探して図書室で逢うから、知っている。生徒会の書記なんかしている奴だ、

真面目なのにユーモアもあって、誰に対しても非常に優しいらしい。更に眼鏡の奥の優しい気な垂れ目が素敵、などと、ビジュアル面でも女子の人気は抜群らしい。男子クラスのうちの組でも、成績優秀で有言実行、そのくせ気さくな性格だと慕われている様な噂を耳にする。

そんな人気者が、何で俺なんかにそんな頼み事をするんだろう？理由が明らかにしないと口を開く気にはなれない、俺は黙って相手の言葉の続きを待った。

「委員メンバー、元々足りてないんだよ。俺も生徒会兼任でやってる位だし。今回一人転校しちゃうんで、更に人員不足になる。橘さ、よく本を正しい順に並び替えたりしてくれてるし、喋ったりしてマナーの悪い奴にそつと注意を促してくれたりもするだろ。そういう真面目な人にメンバーになってももらえたら有り難いんだ」

……まさか、そういう行為を人に見られていたなんて。意識せずにしていた事を改めて取り上げられると、何だか恥ずかしくなってしまう。答えに窮して、俺は視線を彷徨わせた。人気者の優男は続けた。

「橘が座つてるとさ、図書室利用者も増える筈！だからさ、頼むよー」

拝む様に手を合わせて、相手は頭を下げてきた。委員になる事自体は……突然で驚いてはいるが、まあ別に断固拒否、という訳でもない。随分困っている様だし、自分が手助けになれるのなら手伝ってみようかな、と思う。多分に人より本を相手にする事の方が多いだろうから。だけど、今気になるのは。

「……利用者が増える事、ないから。それ期待してなら他当たってばそつと言うのに、相手は顔を挙げた。ああ違う、俺が座ったつて利用者なんて増える訳ないよ、とか軽く返せばいいのに、……わざわざ相手に嫌な思いをさせる様な言葉を選んで。俺の馬鹿、俺つてば根暗！！」

反省に、唇を噛む。なのに相手はーふつと笑って、気を害して

いない筈はないのに、柔らかな表情と優しい声音で告げるのだ。

「綺麗な顔、してるのに……自覚ないんだ。もっと前髪短くすればいい、目元隠すなんて勿体ない」

主旨のずれた台詞と共に、すっと伸びてきた手が俺の前髪をさらりと掻き上げる――びくりと身を跳ねさせて、どうにか相手の手を乱暴に振り払う前に、後退り身を逃がすだけで済んだ。過剰な俺の反応にも動じない高原は、当初の目的を取り戻す様に問いの形を取った。

「図書委員さ。入ってもらえない？」

ばつの悪さ、だけで頷いたりはいしない。相手の真っ直ぐな強い瞳に何か引き寄せられてしまったらしかった。躊躇いがちに、俺は小さく頷いた。

有難う、と両手を取られぎゅっと握られる。逃げようにも相手の力は強く、僅かな接触にすらも反射的に怯える俺の手は、隠せない程に震えていた。

――相手の手が離されたのが俺の震えが止まった直ぐ後だった様に思えるのは、俺の気のせいなんだろうか？

明日委員会だからそこで橋を紹介する予定、と高原は昨日それだけ言って去っていた。委員会って、放課後か？ 図書室でやるんだろうか？ 疑問は浮かぶが、クラスが違う高原の元に聞きに行く事なんて出来る訳がない、またそんなに必死で知っておきたい訳でもない。今日と言う事さえ確かなら、どうでもいい。

お馴染みの消極的な自分が出した結論に納得していた一時限目の後の休憩時間、――高原が現れた。何やら教室内が騒めいた、と思ったら、高原が前のドアから顔を覗かせてきていたのだ。

直ぐにこちらを見付けたいらしい、にこっと人好きのする柔らかな笑みを向け、あろう事か教室の中迄入ってきて――

「橘！！ 今日放課後、16：45位からね。大丈夫？」

今が大丈夫ではない、何なに、と皆がひそひそ言い合っている声が聞こえてくる。こんな注目を浴びてしまうなんて……、かあつと赤くなり、俺は焦ってうん分かった、と早口で頷いた。それだけを見届けて、満足したのか高原は更に深い笑みを残し、待ってる、と意味ありげにも取れる様な一言を落とし、爽やかに教室を出て行った。

一旦しーん、と静まって、またざわざわと俺を遠巻きに見ながら教室内が騒めく。スター並みに皆の憧れや羨望の的である高原と、一人での読書の世界に没頭する事で外界との接触を極端に絶った俺との関わりの不思議に、皆黙っていられなかったらしい。意を決した様に、数人が声を掛けてきた。

「なあ、今日の放課後って何？」

「あいつと仲いいの？」

そう言えばクラスの誰かと言葉を交わす事自体どれだけぶりだろ
う、とふと考えて、はっと我に返り答える。

「委、委員会が。今日初めてだから」

なあんだ、と一斉に教室内が納得したらしい。ひとまずの皆の関
心が自分から離れ、俺はほっとする。

「新メンバーを紹介しまーす！！ 二年二組の橘海璃君でーす！」
たちはやいり

明るい声で、高原は俺の両肩に手を載せ、皆の前に差し出す様に
して告げた。

三年の教室を借りたこじんまりと並んだ委員メンバーは、本の借
り出しと返却の際の対応で顔を知っている人ばかりで、向こうも俺
を知ってくれているせいか、和やかな雰囲気の流れていた。人居な
かったから助かるよ、大変かも知れないけど頼むな、と気さくに声
を掛けられ、抱負を一言、と委員長に促され、一生懸命頑張ります

のでご指導宜しく願います、と当たり障りのない言葉で挨拶し、後は繰り広げられる話し合いを聞いていた。

皆が順に当番制で図書室での貸出し業務を行っている為、俺にもじきにカウンターに入る仕事が回ってくるらしい。でもその間に好きな本を読んで過ごせるのだとしたら、俺にとっては天国の様な委員だ。

閉会し、皆が解散し帰った後に、わざわざ俺の為に委員メンバーの名前をもう一度教えてくれたりして、高原は実に親切な奴なのだった。自然と笑んで有難う、と呟いていた俺に、高原はにっこり笑ってくれた。

「それはこっちの台詞。突然無理矢理誘ったのに、快く引き受けてくれた橘の優しさにこそ感謝だよ。俺ってば見る目あんだよね」

優しい口調、いい奴だなと素直に好感を持てる。男女問わず人気者な訳だ。こんな相手と交流を深められれば、心を覆う氷は溶けるだろうか。人を信じてみようかと、止めていた足を踏み出せる様になるのだろうか……。

……期待する様な目で相手を見てしまってもいたのだろうか、何だかゆつくりと近付いてきた高原の顔が、その目が、今迄感じた事のない何か危うい空気を漂わせ、絡め取る様に……

ーばつと勢い良く体を遠退けた、何だ今の雰囲気、と俺は焦る。キ……キス、されるのかと思った。

まだ悠然と不可思議な空気を纏わせたままに、高原の目が熱っぽく俺を見ている様に見えた。見えた、だけー人付き合いを長く絶つとこんな事になるんだ、と俺は自分の過剰な勘違いがもたらしてしまった恥ずかし過ぎる雰囲気をもとにか消すべく、武骨な声を挙げた。

「い、色々と親切にしてくれて有難う。今日は図書室閉館日だったよね、早く帰ってゆつくり出来る機会を有効に使わないと。また次に逢った時に色々教わろうかな、俺も今日は頭がいっぱいだから」

馬鹿みたいに予防線を張った俺の物言いをそうだね、と笑って流してくれた高原は、矢張りもう今はおかしなところもなく見えた。俺ってば何混乱してんだろ、と頬が熱くなる。他人とここ迄近い距離で過ごす事など随分久方振りで、妙に意識してしまった自分が勝手に変な妄想をしてしまっただけだった。

「図書当番表も一週間以内には出るだろうから、またその時にね。そうだ、連絡取り合うのにさ、メアド聞いておきたいんだけど」

ぴくつ、と俺は背筋を伸ばした。小さな声で、ない、と呟く。

「ない？」

「……俺、携帯持ってないから。パソコンもないし。ない」

「あ、そうなんだ」

珍しいな、と言われる事を構え、何となく感じてしまう劣等感に身が縮まる思いだ。だけど高原は違っていた。大した事ではないといった風に、さらりと会話を続けてくれるのだ。

「図書委員としては、メール出来たら嬉しいかも。言い忘れてたけど土日にも図書室開ける時あるから、予定当番日の当日の変更とか出ちゃうんだよね。そういう時の連絡とかにさ」

「ああ……」

それは必要だ、と俺は頷く。わざわざ連絡の為に高原に教室に来て貰うなんて、申し訳ないし恥ずかしい。考える俺に、高原は一言付け加えた。

「それにさ、好きな本発表しあったりさ、本以外の好きな事語り合ったりも出来るしね」

それには、咄嗟の返事が出来なかった。え？ とか馬鹿みたいに目を丸くする俺に、高原はお馴染みの柔らかな笑みで言うのだ。

「友達としてさ。橘とメール出来たら嬉しいな、俺」

無邪気な子供の様な顔で。どんな意味合いで発せられた言葉なのか。

いつの間にか高原と自分は友人になっっていたらしい、ただの知り合いではなく。それすらも何だかどきどきして消化しきれずに居る

のに、弾けんばかりの人懐こい笑顔を向けられて、俺にはどう答えればいいのか分からない。

目線を反らしながら俯いた俺に、真面目な声で高原が言い出した。「ごめん、携帯持つのお金も掛かるし、強制出来る様な事じゃないのにね。まあ連絡手段なんかさ、いつでも教室に言いに行けばいいし、靴箱に手紙入れたりも出来る話だしさ」

明るい高原の声、また相手に気を遣わせてしまっているー最大限に勇気を振り絞って、俺はばつと顔を挙げた。

「携帯っ、買、買おうかなって丁度考えてたところだったんだ。……本当に」

付け足した処が余計に不自然に響いただろうに、高原は深い穏やかな笑みで俺を見て、尋ねるのだ。

「メアド決まったらさ、一番に俺に教えてくれる？」

頷いた俺に微笑んでみせて、それで話題は終了とばかりに高原はじゃあ、と立ち上がる。気恥ずかしい俺には、そんな高原の自然な気遣いは心底嬉しいものだった。

親の了承を受けて、携帯を持たせて貰う事になった。他人どころか親とすら付き合いを避けている俺が、人とのコミュニケーションツールを必要とした事に、両親は驚きつつ喜んでいる様に見えた。

携帯を持つに当たって、一つ勇気を持ってトライしなければならぬ問題が浮上した事に、俺は気付いてしまった。心は大分怯むが、逃げずに挑まなければいけない問題だ。今からの新しい人生の為に、これからの、自分の為に。

教室内に声を掛けに行く勇気などはない。昨日高原が教えてくれ

た連絡方法、靴箱に手紙を入れるという方法を取らせてもらった。

指定した返事のメモが靴箱に返されると思っていたのに、放課後、また高原はわざわざ俺のクラスにやって来た。

注目を浴びたくないから取った手段だったのに……慌てて鞆を引っ掴み廊下に出る俺に、高原が小さく言った。

「ごめん、目立つ様な事して。でもさちよつと、手紙で返すには嬉し過ぎちゃってさ」

意味が分からない俺に、周囲を気にしてか高原が来て、と俺の腕を取る。ここは素直に人の居ない所に誘導して貰おう、と俺は早足の高原に歩調を合わせて歩き出した。

図書室にでも行くのかな、と思っていた俺を、高原は校外に出て、見知らぬ道を歩いてどこかに連れて行く予定らしい。

……こういう、先の見えないシチュエーションは苦手だ。顔を知った人間に痛い目に遭わされた経験を持つ俺は、否定を上回るフラッシュバックを重ねてしまうから。幾ら高原はそんな事をする様な人種じゃないと自分に言い聞かせようとしても。

だけど、苦痛を訴えてみる間もなく、高原はそこが目当ての場所だったのか、小さな公園に俺を導き入れた。木の切り株の断面になった椅子が点在するそこに、高原は無造作に座る。一つ一つが近過ぎず遠過ぎず、いい感じに配置された椅子に安心して、俺も高原の隣のそれに腰を下ろした。

「ここさ、何か落ち着かない？ 好きでよく来るんだ、俺」

分かる、と俺は頷いて。ただ、公園で話しよう、とでも歩きながら教えてくれたら良かったのに、と一言抗議してやりたい俺としては、不機嫌をそのまま口に載せた言葉を返していた。

「いい場所だから今は座ったけど、そうじゃなかったら俺帰ってたよ」

不意を突かれた様に、高原が驚いて俺を見た。高飛車に響いた不器用な強気の発言に早くも後悔している俺は、思わず目を伏せて、そのまま顔を下に向けて、誤魔化す様に言い添えてみた。

「……知らない場所とか、怖いから。今から何するとかが分からないのも。黙って連れて来られるの、本当は俺駄目なんだ。だから……」

「ごめん」

まだ言葉を探していた俺を、高原が低く遮った。今回は深く落とした顔を挙げられない、ぐるぐる回る反省に泣きそうになってしまっていたからだ。

「ごめん、とまた高原が口にした。続く言葉を待つ俺に、降りてきたのは言葉ではなく――」

――視界が、暗く覆われた。次いで感じる、体の圧迫。体温。間近な心臓の搏動。爽やかな、でも男の匂い……。

抱き締められた、と気付いて、咄嗟にもがく様に手を出そうとした。なのに高原の強い腕は、身を動かす僅かな隙間をも俺に与えてはくれなかった。

羞恥よりも恐怖が先に立った、抑えようのない震えが全身に走り、その違和感にしろつか、高原がゆつくりと腕を解いてくれた。

椅子から動けず、その場で身を縮める俺を解放して、でも高原の手は俺の両腕に優しく残されたままだった。がたがたと震える俺に、静かな高原の声が降ってきた。

「ごめん……君の事を、まだ俺は何ひとつ知らないみたいだね」

予想とは違う言葉、それよりも声が近くなった事に、高原が自分の前にしゃがんだらしい事を気配で感じ、俺はびくつと肩を揺らした。

「どうやったら、君の事を傷付けなくてすむのかな。俺さ……君に近付きたいんだ。君の、力になりたい。君を救いたいと思ってる」

真剣な口調が、高原の人間性を表している様に聞こえた。恐らく嘘偽りのない、純粋な心配。触れた腕からも優しさが流れ込んでく

る様な錯覚、身を委ねたくなる安心感……。

体の震えは引いた、丸めた体から俺が顔を挙げる事など期待して
いないのだろう、高原はまだ優しい言葉を続けてくれる。

「図書室でよく逢ってただろ。何でかな、君の事が気になって仕方
がなかったんだ。明るく笑ってる方が似合ってるだろうに、いつも
俯いて暗い顔して。そんなの本来の君じゃない気がするさ。何か…
…心の底では助けて、って叫んでるみたいに見えるんだ」

……問題が、触れられたくない核心に近付きつつある。高原は、
どこ迄を知っているのだろう。危険だと、頭の中で警鐘が鳴り始め
るーー思わず、高原の手を振り払う様にして立ち上がった。いた。

「たちば」

「気持ちだけ、有難う。けど……救ってくれなくていい。力になる
とか。要らない」

小さく、でも強く言い切った。そのまま顔を見られない様に、き
びすを返して走り出した。高原が追って来る事がないのは分かって
いた、でもがむしゃらに俺は走っていた。

……自己嫌悪。優しい相手の親切心を踏みにじってしまった。越えようとした壁を、また自分から高く頑丈なものにしてしまった……。

行きたくない気持ちが足を重くする、周囲より遅く歩いているのに、学校にはきっちり着いてしまうのだ。

考えるのは昨日の事ばかり。呆れて、もう図書委員なんてしてくれなくていいから、と高原に言われるだろう事を覚悟していた。

昨日の朝、俺は高原の靴箱にこうメモを入れた。『携帯を買おうと思っています。高原の持つてる携帯の会社はどこ？ 同じだと便利かなと思ったので』

でももう、携帯自体がなくなっちゃったな、と俺は溜め息をついて靴を脱ぐ。開けた靴箱の中に置かれていた大きな封筒に、俺は面食らった。

Docomoと印字された封筒に、中身は……電話機種のパンフレット。啞然とする俺は、ひらりと落ちた小さなメモに気付き、それを拾い上げた。

『姉貴が働いてるので、うちは一家全員ドコモです。良かったらパンフ見てね。買う時はゼヒ姉貴の店で！！ 頼みます 高原より』

そうして、右下に小さな文字で。『P S：昨日はゴメン』。

――泣きそうだった。あんなに冷たく突き放したのに、恩を仇で返す様な仕打ちをしてしまったのに。嫌われて、避けられるだろうと思っていたのに。

――放課後に逢いに行ってみよう、と俺は思った。俺の方から謝らなきゃいけない、礼を言わなければならない。潔い高原の誠意に応える為に。

入って行く勇氣はない。教室の入り口から目立たない様に少し離れた場所で、出て来る人を見張るだけだ。

大分待って、ようやく見慣れた長身が何人かと話しながら出て来た。一人じゃないパターンは想定外で、声を掛けるタイミングを失い俺は焦った。

慌てて集団の後を追いつける。高原が行ってしまう、きっと今を逃したらもう俺は永遠に高原に声など掛けられなくなるのだ、また元の塞ぎ込んだ世界に逃げ込んで……。でもそれじゃ駄目なのだ、今、今こそ死ぬ氣の力を振り絞らないと……

切迫した考えは一瞬、極度の緊張に心臓がばくばくと鳴っている。それは自分には大きな音で、だが他の人には聞こえていないのだとは気付きもしなかった……。心臓の騒めきに掻き消されない様にと、俺は叫ぶ様に呼んでしまっていた。

「たかはらあつー!!」

尋常じゃない大声に、ありとあらゆる場所から視線が集まってしまった。振り向いた高原は、直ぐに破顔し、じゃあなと友人達の肩を叩き、足早に俺の方に歩いてきてくれた。

「図書室、行こうか」

俺の知った場所を指定してくれる高原の氣遣いに感謝しつつ、恥ずかしくて堪らない俺は、何度も頷き慌てて歩き出す。

中での私語は厳禁なので、今居るのは建物の裏だ。後ろに広がる林との境界にした、小さな木の杭が張り巡らされたそこに並んで座って、昨日の事怒ってないのかな、と考えつつも何と切り出そうかと俺が言葉を選ぶ間に。

「まだ、顔が赤い」

言うなり手が伸び、左頬に触れた。びくつと体を伸ばす俺が逃げの体勢を取る前に、だが高原の右手はすつと落とされた。くすつといったもの笑みで、高原は続けた。

「あんな大声出さなくても、ちゃんと俺橘の声聞こえるよ。必死だったの?」

含まれる、からかいの響き。自分の心臓の音が、なんて言い訳にするにも恥ずかしくて、俺は頷く事にした。大体、今日は謝りたくて来たのだ。こうやって何事もなかった様に接してくれる高原に感謝を伝える為に。

だから、俺はまず、ごめんなさい、と口にした。ん、と自分に向けられる相手からの視線を微かに避けながら、俺は続けた。

「高原が俺を心配して言うてくれたりしてくれた事、否定したりして。ごめんなさい。それと、有難う。俺みたいなの気に掛けてくれて、俺の分かってなくて気を害する言葉とかにも、怒ったり呆れたりしないで、こうやって俺の事許してくれて。本当に有難う」

一気に言った俺を見つめる高原の目は、本当に透き通っていて優しい。どんな返事が返ってくるのかと思ったら、高原は笑みも変えずに尋ねてきた。

「頭、撫でていい?」

「は?!」

驚いて目を丸くする俺の顔にずっと顔を近付け、高原が真面目な口調で言った。

「まず逃げようとする。でも今日は自分から俺のここに来てくれた。嬉しいからぎゅっとしてやりたいんだけどさ、橘にとっては刺激強過ぎるだろ? だからせめて、頭撫でたい」

……その理屈は筋が通ったものなんだろうかと俺は考えてしまう。けど普通に考えて男の頭なんて撫でなくなる筈もない、高原なりの相手の頑張りを評価するやり方なのかな、と俺は結論付けて、頷いた。

「う、うん。どうぞ」

どうぞはおかしいだろ、と自分にツツコミを入れた俺の頭に、優しく高原の手が載せられる。本当になでなで、とまるで子供にする様に手が動き、直ぐ間近に居る高原がどんな顔でそんな事をしていいのか気になりつつも、それを見てしまうには恥ずかしくて、俺は目を伏せていた。

……いつ迄、撫でてんだろ。さすがにもういいんじゃないか、と俺はちらりと上目遣いに高原の顔を窺い見ようとした。校内だし、どこから誰に見られているかも分からない。こんな、あらぬ誤解を受けてしまいそうな怪しい行為……。

俺が見上げた気配に気付いたのか、高原は手を止め、ようやくゆっくりとその手が下ろされた。何だかこそばゆい様な気恥ずかしさに、俺は言う言葉も見付けられずに視線を彷徨わせていた。ぼつりと、高原が問いを口に載せた。

「結局のところ、どっち？」

「え？」

主語を省かれ、何を尋ねられたのが全く分からない。説明する様に、高原が言い直した。

「昨日はさ、俺が困らせる様な事したからさ、いらないって言うたけど。俺、君の力になりたいって言ったよね。救いたいって。やつぱ今日聞いても答えはノーなの？」

――一歩で、決る様に胸元に入り込まれた感じた。避けられないパンチ……ごくり、と俺は努力して唾を呑む。

瞬時に巡り巡った思考が、こんな状況で浮かんだとは思えない、都合の良い逃げ口上を落としてくれた。飛び付く様に、俺はそれを口に載せていた。

「……高原とこうして仲良く喋ったり出来るだけで、俺には救いになってるよ。すごい力貰ってる。これ以上に幸せな事ない位だよ」

笑ってみせたのに……笑い慣れない俺の笑顔がそんなに不自然に見えたのだろうか、高原はどう見ても納得なんてしていない顔で、じいっと俺を見つめている。

どうしよう。高原は、妥協を許さない人の様だった。中途半端な逃げは解決にはならないのだろう。上手い事言えた、と内心ほっとしていたのだけれど。

「えっと……」

考えて、考えて、俺はようようの呈で言ってみた。

「高原に出逢えた事が、本当に俺の救いだと思う。高原に声掛けて貰わなかったら、俺……生きてるのに死んでるままだったよ。高原のお陰で、ちゃんと生きてるって思ってる。嬉しい気持ちが増えて困ってる位」

見つめられて、最後の方なんか何を言ってるんだか自分で恥ずかしくて、俺は穴があつたら入りたい状態だ。そんな俺を、気が付けば直ぐ近い位置から視線を合わせてきて、高原は囁く様に尋ねるのだ。

「それ、本音？ 俺、役に立ってるの？ 橘の嬉しい気持ち、本当に増えてる？」

何の為の確認なんだろう、と俺は思う。とろりと絡みつく様な高原の目、甘いとしか思えない囁きに、また抱きすくめられる事になつてしまいそうで、俺は必死に予防線を張ろうと試みた。

「恥、恥ずかしい事の方が多いけど」

言いながら、じりじりと体を後ろに逃がしてみる。そんな俺の企てに気付いたのか、橘、と高原の手が伸びてきた――

バアン、と叩き付ける様にドアが閉まる音、それに被さる様に不機嫌な叫び声。

「出てきやいいんだろっ！！」

ガアン、と壁に蹴り込入れて、声の主が足音も高らかに歩いて行く。いつも図書室でふざけたり利用者に絡んだりする迷惑な人だ、と俺は気付いていた。抱き寄せようとしていたらしい手を俺の背に載せていた高原が、図書室から追い出されたらしいその乱暴者に気を取られた一瞬。

……いい時に大きな物音と大声、感謝します、と俺は、もう見え

ないその人の背中に内心頭を下げ、高原が動くより先に体を後ろに逃がしながら立ち上がった。離れた高原の手、酩酊していた様だった表情が醒めた様に、高原が何か言い掛けた。遮る様に、俺は強く口にしていた。

「とっ、友達だよね?!」

まだ何も返さない高原に、釘を刺す目的で繰り返す。

「高原と俺、ただの友達だよね?」

好きとかなしにーそう付け足したかったけど、実際口に出る筈などなかった。高原の優しさは、友人として心配してくれる範囲内のものだと思えた。昂ぶる様に色香を纏わせるあの熱っぽい目に、おかしい意味はないのだと思えたかった。

充分に離れた距離を置いて全身に緊張を走らせる俺を見返して、高原がふっ、と笑った。

「うん、友達。ごめん、何か誤解させちゃったみたいだね」

軽く返して、服に付いた草や砂をはたきながら高原も立ち上がった。向こうからあっさりと言われて、俺は意味もなく首を横に振ったりしている。近付いてくる高原にまだびくりと身構える俺に、置きっぱなしだった鞆を手に取り渡してくれながら、相手はさらりと言っただ。

「ごめんね。俺さ、可愛いものの好きフェチが尋常じゃなくてさ。今もそうなんだけど、君、人に慣れてない子犬過ぎるから。何してても可愛く見えるから、つい手を出したくなっちゃうんだ。あーよしよしって感じにさ」

……先程頭を撫でてきた感じ、に思えばいいのだろうか。男だとか人としてじゃなくペットの様に見られてしまっているらしい事は不快ではないが、可愛いとか称されるのには問題あるかも……。

複雑な思いの俺に、高原は静かに告げる。

「ごめんね。何か俺舞い上がっちゃったみたい。橘に友達だっと思ってもらえてんのも、純粋に嬉しくてさ。……俺達、友達なんだよね?」

今度は高原が俺に確認してくる。どぎまぎする恥ずかしさがまた沸き上がるが、どうにか真面目な顔で俺は頷いた。

「……うん、勿論」

にこつと笑ってみせて……帰ろうか、と高原は言ってくれた。

――閉じた目の奥に、高原の優しかったり色っぽかったりする顔が貼り付いて、なかなか眠りは訪れないのだ。

次の日、その次の日と高原は現れなかった。安堵と寂しさを半々に感じたりする自分が意外だった。そうして今日は金曜日、今日を逃せば月曜日迄高原に声を掛けられない。大事な用事に、登校して一番に俺は靴箱への手紙を置いた。

『携帯を買いたいから、高原のお姉さんの勤めてるお店に案内してもらえると助かります。今日の帰りにでも、高原の用事がなければ……』

――どんな形で返事をくれ、といった事を指定しない一方的な文面に、俺は後悔していた。これじゃまた、高原を来させてしまうかも。俺って何て考えなしなんだろう。

自分からまた高原の教室に行くべきなのか……踏み出せない躊躇に悶々とする俺を、休み時間に担任の先生が呼んできた。

「おい橘、新生図書委員。預かりもんだぞ」

渡された用紙は、この間初めて紹介された時の図書委員会のもだった。二枚に亘る、議事録、と題された書類には、正式に俺を図書委員に任命する、というのに始まり、話し合っていた内容や、恐らく決定したらしい放課後や土日解放時の業務担当者の割り振りの表が示されていた。

目を通して、最後の行の様に付け足されたものらしい高原のメッセージに気付き、俺は破顔した。『姉貴大喜びだよ。今日の放課後、校門の左側でおちあいましよう。急いで行くから!』。

目立たずに連絡を取る事を考えてくれた高原の気遣いに、心底俺は感謝する。でもふと気付いた、高原は本来生徒会に所属しているけれど、人員不足の為に図書委員を兼任しているのだ。確か部活には所属していないらしいが、忙しいには変わりないだろう。

そんな合い間に、自分なんかにつき合わせるのは申し訳ないな、と思う。まあでも今日携帯を買えば、これからの連絡は逢わなくても出来る訳だから。今日だけ、我慢して貰おう。

そんな色々を考えるのが楽しいと感じる事に、俺は気付いてはいなかったけれど。

校門の左側、地形的に少し窪んで大きな木が植えられた場所に、高原は既に待ってくれていた。俺が声を掛けようとする前に、俺の後ろから数人が高原を呼ばわった。

「マサじゃん。何してんのー」

……人気者だもんな、と気付かれない様に下がりながら、俺は思う。俺なんかとの接点、皆に不思議に思われるだろう。矢張り携帯は早く持つべきだな。

わざと隠れたのに、声を掛けてきた友人数人にまずおう、と返しただけで、あろう事が高原は俺の居る方に向かって来ている様に見えた。まさかと目を剥く俺の前に高原は立ち、極自然に俺の手首を掴み――

「今日は橘と買い物なんだ!」

わざわざ皆の前に引っ張って立たされる、まるで皆に自慢するかの様に……友人達が、ああ図書委員のね、こないだの、と納得するのを、俺は困惑して高原を盗み見ながら俯いていた。

「どこか行くの、と聞かれ、鞆でもぶらぶら見に行こうかな、などと高原は適当に返している。じゃあな、邪魔しちゃ悪いからな、と友人達が去って行くのに手を振っている高原の右手から、まだ掴まれたままだった自分の手を、俺は乱暴に取り戻した。目を向けてきた高原を、つい俺はきつと睨み上げる。」

目立つ事が嫌なのは、承知してくれていると思っていた。委員会の議事録に返事を載せる手段なんてとってくれた配慮が、その証拠だ。なのに。

「ここでもいいの？ また誰かに声掛けられちゃうよ」

真面目な顔で言われて、俺ははつとする。次々に下校して来る生徒達が二分の一の確率で通るここに、いつ迄も居られない。何も言わない高原に、俺が促す形になった。

「……お姉さんのお店に、案内して貰える？」

「うん行こうか、と歩き出した高原に、やや離れて俺はついて行った。」

考えてみれば、俺が高原に怒る義理はないのだ。もしかして今日、高原が誰かからの誘いを断って俺を優先させてくれたという可能性だってある。俺は俺一人の一方的な要求・不満を相手にぶつけているだけだ、相手がどんな人物でどんな状況にあるか、などを一切考えないで。

歩きながら、いつも何か話し掛けてきてくれた高原が今はずっとなんとも言えない、勝手に怒りをぶつけた俺に気を害したからかも知れない。乱暴に手を振り払ったりして。

……見上げる事は出来ない。そんな勇氣はない。だけど、この重苦しい雰囲気は何か自分が打破しなければ。

小さく、俺は努力して声を落としてみた。

「……ごめん。俺が怒るのおかしいのに」

「え？」

俯いた声は下に流れる、高原に聞こえないのは仕方がない。僅かに顔を挙げて、俺はまた口にした。

「俺が勝手に怒ったせいで、今嫌な感じにさせてる。……ごめん」
高原の返事はなかった。本当に、相当嫌な気分にさせてしまってたんだ、と俺は軽々しい自分の物言いに今度は蒼ざめる。あの穏和な高原に、沈黙を選択させるなんて。

もう、足が進まなかった。道の真ん中だと分かっているながら、俺は立ち止まってしまう。橘、と掛けられた高原の声が優しいのに、来て、と俺の二の腕に触れ促す様に引つ張る手付きが柔らかく慎重なのに、俺ははっと顔を挙げてしまった。

怒ってはいない、見慣れた優しい笑みを浮かべた高原の顔を見てしまつて、でもこれはきつと建前の顔なんだ、と俺は目を反らした。先程振り解いた事を反省しているだけに、引つ張ってくる高原の手を今度は俺はどかせない。高原の優しい声が、恐らく身を屈めてくれたのだろう、近い位置から俺の耳に入ってきた。

「少し歩いたら、こないだの公園に着くから。来て」

頷いた俺は、優しく手を引く高原について、止まってしまつていた足を無理矢理に動かした。

自分で勝手に座る向きを調節出来るのが有難い。先日は、そう思っていた。なのに今は、俯いた俺の真正面に、しかも俺を覗き込む様に腰を落として、高原は座っていた。

逃げ場はない。高原がそうするのは多分に自分への怒りのせいだ、と思うから耐えているけれど。……ぎゅっと体を包まれてしまった事もある、今思い出す必要はないのに何故だかそれがやけに思い出されてしまい、ますます俺は顔を挙げられずに居る。

「橘」

声を掛けてきてくれる高原に、今は相手からじゃなく自分から話をしなければならぬ、と俺は焦った。意味もなくここに立ち寄りせた事も含めて、自分が謝るべき事態だ。

最大限の勇氣をもって俺は顔を挙げた、待ち構えている高原とばかり目が遭ってしまうのに面喰らいながらも、勢いを利用して俺は口を開いた。

「ごめん、俺が怒るのがまず間違いなのに。ちゃんと謝れないし。高原の貴重な時間無駄にして」

一度に色々盛り込んだせいか、ん？ などと高原は小首を傾げただけだった。自分自身で再度言葉を噛み砕き、俺は続けた。

「……俺が馬鹿な態度取るから、高原に嫌な思いさせた。高原忙しいのに、わざわざこんな用事に付き合って貰ってんのにこんな無駄な寄り道とかさせて。俺、が」

後は何を謝るべきか、箇条書きが苦手な俺にはぱつと浮かばなかった。考えに浸ってしまった俺に、ははっ、と楽し気に高原が笑いを聞かせた。

「本当にさあ、何て言うか……何から言えばいいのかなあ」

呆れている、と俺は身構えた。本当馬鹿なんだなお前、と蔑まれる位なら普通だ、お前みたいなのにつき合ってられないやと去って

しまわれる可能性を考慮し、俺は固唾を吞んで高原を見つめている。
心底優しい笑みで、高原は優しく言い出した。

「何で、ごめんなの？ 何で君が怒るのが間違いな？ どんのが馬鹿な態度なの？ 何で俺が忙しいと思うの？ 俺が貴重な時間無駄にして君に付き合っただけでやっただけで、どこからそう思うの？」

俺の言葉の殆どを切り返す質問の嵐に、俺は啞然として高原を見つめていた。答えを求めてはいないらしく、直ぐに高原は続けた。

「自分の事卑下するのは良くないよね。君を怒る人はいないんだから、自分を殺す必要もないよね？」

……何か、含みがある様に、それは聞こえた。けれども問いを挟む度胸が俺にある筈もなく、またどんな小さな事でも真意が明かされる事が怖い俺としては、分かった様に頷くだけだ。唐突に顎に手が掛かり、ぐいつと上を向かされた。

「すぐ俯くのも良くないな。折角の顔が見えなくなる」

そう言う高原の顔が、また直ぐ近くにある。普段は眼鏡に中和されているけれど、近付くと分かる端正な顔に對峙させられて、俺は息を呑む。……甘く漂う雰囲気はない。熱を孕んだおかしな空気もない、だからこそ逃げずに我慢は出来ているけども。

「今の俺、嫌な思いさせられてる様に見える？」

その問いには答えを求められているらしいが、言い出した当事者の俺がそれを肯定するのも否定するのも、何かおかしい気がする。

「ただ今迄の流れからいって、と卑怯にも空気を呼んで、俺は首を横に振った。」

「う、ううん」

にこっと、正解にか高原が笑った。息の掛かる様な近い位置で話をする事には慣れているのか、そのままに相手は会話を続ける。

「今日はさ、嬉しい事沢山だよ。橘が自己主張した。橘の方から一生懸命俺に近付こうと努力してくれてる。今も、逃げないでいてくれる」

そうして、ゆつくりと顎の手が離れた……最後の一言を言わしめる為の、知らなかったが布石でもあったらしい。

俺に対するリハビリみたいだ、とふと思った。悪い所を正そうと指摘して俺に言い聞かせてくれてる様に思える……

「俺にとつて、橘と過ごせる時間は何より大切に、嬉しいものなんだ。こんな寄り道、大歓迎だね」

「――博愛主義者なのかな、と思う。弱い所を敏感にキャッチし、助けようと動く事が出来る人なんだ。そんな事を考えながら、高原の深い意味のありそうな台詞を、俺は余り理解を求めずに聞いていた。

「覚えておくといいよ。君といて、俺が嫌な思いする事なんて絶対にないって」

「……う、うん。有難う……」

柔らかな口調から滲む強さ、言い切る自信に、ついそう返していた。……どうやら本当に、先程の俺の態度や言動にも怒ったり気を悪くした風はない様だけれど。

「可愛いもの、俺いつ迄も眺めていたいんだ。出来ればすぐ近くでさ、もつと言うなら触れていたいしさ」

真っ直ぐに俺を見つめて、また高原は際どい台詞を発するのだ。許容の限界を超えるそれに、さすがに俺は口を挟まずには居られなかった。

「……俺、一応男だから……。高原、趣味悪いよ」

はははっ、と高原は心底おかしそうに笑った。言うねえー、とばしばしと俺の肩を叩いてくる。そこ迄大笑いされて、ほっと俺も口を綻ばせた。

矢張り結局は相手に助けられて。じゃあ行こうか、と促されてしまつて、慌てて俺は立ち上がる。せめて店に着く迄は、と俺は、これ迄にない頑張りで自分から高原に話題を提供するのだった。当たり障りのない図書委員の仕事についてなど。

「いらつしゃいま……あ、まさなお」

高原の紹介を受ける迄もなく、高原と同じ顔の、綺麗な優しい顔付きの彼のお姉さんがそう呼んだ。客が少なく空いた時間らしく、他の店員さんに案内され、直ぐに高原と俺はカウンターテーブルの向こうで待つお姉さんの前に立った。

「お待ちしておりました、お話は伺っております。新規での御購入のお手続き、と言う事で宜しかったでしょうか、橘かいり様？」

「は、はい。宜しく願います」

緊張して頭を下げる俺を、何だか高原と同じ様な表情でお姉さんは見ているのだ。……いわゆる、『可愛いもの』を見る目付き。さつさと椅子に腰掛けて、高原が俺にも座る様に促してくる。どうもとかまたぺこりとしながら椅子に腰掛ける俺に、お姉さんのぼつりと落とした声が聞こえた。

「顔もだけど、声もなのねー。まさなお、上出来。ケーキおごつてあげる」

「姉貴、仕事」

笑って、高原が促した。はっと立ったままで緩んでいた顔に気付いたのか、お姉さんはきりっと仕切り直した仕事人の顔で、椅子に腰を下ろし俺に話し掛けてきた。

「失礼致しました、それでは早速ですが、機種などはお決まりでしょうか？」

「それが……余り良く分からなくて」

正直な感想を、俺はももごと口にする。パンフは見た、全部隅々迄読んだ。だけでも携帯初挑戦の人間にとって、進み過ぎた技術の説明はまるで外国語を見ている様で、どうにも解読不能だったのだ。

横から、高原が問題を噛み砕く様に聞いてきた。

「色とか見た目とかの希望はあるよね？ ごつごつした四角いの嫌

とか、薄くて軽いのしか嫌とか、ごちゃごちゃデコレーションしてあんの嫌とかさ」

「うん、それはある程度。……派手な色は苦手。四角いとか丸いとか薄いとかはそんなに気にしないけど。一番に、操作がすごく簡単なのじゃないと、多分俺人より理解力ないし使えないと思う。そんなには使わないと思うから、あんまり機能は良くなくていい。……です」

つい高原に返していたが、パンフを広げてくれているお姉さんに向けて、焦って語尾を付け足した。お姉さんのにこりと笑みを深める優しい雰囲気は高原と同じで、何だか俺は安心してしまっただった。

「使用目的は主にメールと電話になるだろうね。カメラ、使う？」

高原に尋ねられても、俺には咄嗟の返答は出来兼ねる。使われないかな、と返そうとしたのに、何故だか高原にすぱつとまとめられた。「カメラは使っていてどうか。適度に高画質なやつがいいね。他に望む機能は？ ……今はない？ 分かんないよね、実際使ってみないとね」

弟の仕切りを笑顔で見守って、お姉さんは携帯を二つ、すつと差し出してきた。

「お形二種類ございますが。こちらのスライド式のものと」

向かって左側の携帯の、上部分だけを滑らせる開け方に、俺は余りにも驚いてしまった。初めて見た、食いつく様に見る先、今度は右側の携帯が、お姉さんの手の中、もう一方の手も使わず魔法の様に自動で開いた様に見えて、俺はそちらにも釘付けになってしまう。「こちらのオープン式のものとがございますが」

「どっ……どうやって開いたんですか今の」

右側のそれに、つい俺は反応してしまった。携帯の側面のボタンを示して、お姉さんが丁寧な説明と再度の実演をしてくれる。

「こちらのボタンを一度軽く押して頂くだけで、自動的に閉じた画面が開く様になっております。どうぞ、お手にとってお試し下さい」

手渡された携帯を、恐る恐る説明通りに操作してみる。パカッと小気味よく開く感触に、俺は感動してしまっていた。

「すごい、恰好いい……。手品みたい。かつこいいや……」

夢中になって何度も開閉を楽しみ、下から横から携帯をぐるぐる回して眺める俺を、二人はにこにこしながら見守ってくれていた。余りに長い事楽しんできてしまった事に気付き、俺は慌てて携帯をテーブルに置いて返した。

「ご、ごめんなさいいつ迄も。つい」

俺の恥ずかしさをさらりと流す様に、お姉さんは何冊かパンフをめくっては広げ、示してきた。

「こちらのワンプッシュオープンのものでお探し頂きますと、これですとか、こちらになりますね」

指で示されるあちこちを目で追うのも一苦労だ、ついていけない俺に、問題を根本から打開する様な高原の提案が落とされた。

「選ぶの大変じゃん。俺のと同じのにしてみる？ そんなに難しくないしこれ。橘の気に入ったワンプッシュオープンだしね」

鞆から取り出した自分の携帯を、高原は俺に手渡してきた。勝手に触るのは躊躇われる俺の手の合い間から操作し、高原が自分の携帯の画面を開いてみせる。

目に入った待ち受け画面、お姉さんや両親らしい人と一緒に笑って写った高原の、多分家族でのものらしいそれ――

だからか、と俺は納得する。高原は愛情いっぱい家庭で優しく育ったのだ、だから他人への愛情に満ち、誰にでも優しく出来るのだろう。俺とは違って。

――今こんな所でうじうじそんなの考えてどうする、と珍しく俺は頭の中に暗く落ちてきそうな考えを振り払おうとした。『優しい』高原は俺と居て嫌な気になる事はない、なんて言ってくれたけども、親切に付き合ってくれているこんな時に、馬鹿みたいに黙り込んだり暗くなったりするなんて最低だ。身の程知らずだ！

気を奮っている俺には、画面を覗き込む為に身を寄せた高原の顔

の近さを意識する余裕もなかった。これがメール送信画面、これが電話帳、これがカメラ、と高原が教えてくれるのを目で追う事に必死だったせいもある。

くすつと笑って、お姉さんがそつと言い添えてきた。

「只今キャンペーン中でして、そちらの機種自体のお値段も下がっております。更にお友達紹介が適応されまして五千円の割引、学生さんですので学割、全くと新規でいらっしゃいますので初めて割引などにも対応致しております。後は……そうですね」

他の店員に聞こえない様にか、こそつとお姉さんは囁いた。

「私が個人的に認定した可愛い人に向ける、キュート割引も適応になりますね」

ぷつ、と高原が吹き出した。しれつと沢山に広げたパンフをテーブルの上から片付けるお姉さんの澄まし顔に、俺は無理に笑おうとして複雑な顔になってしまった。……高原姉弟の好みは偏っている、と俺は思う。

早速買った携帯の操作方法を、帰り道に高原に教えて貰う。家に着く頃には、何とか電話・メールの初歩的な理解が得られていた。気が付けば家の真ん前迄来ていた。家に着いたから、とも気軽に言い出せもしない俺は、不自然に黙って足を止めた。携帯から顔を挙げた高原に、焦って選ぶ暇もなかった馬鹿な一言を投げてしまっていた。

「後は自分で説明書読むから、もういい」

言い方こそ柔和であれば、そこ迄ぶしつけに突き放した響きは表れなかっただろう言葉。自身で思わず息を呑む程に。

しまった、と後悔に苛まれ、俺はまた下を向いてしまう。ここが俺の家だとこの状況で高原に分かる筈もない、俺の暴言は高原にとって、親切に突然水を差すだけのものだったに違いない。

「橘……」

今迄は聞いた事のなかった呆れた響きが、そこにはあった。さすがにもう寛容な高原にも限界だったんだ、と俺は目をつぶる。今更ごめん、なんて言葉を挟む事も出来ず、俺は肩から広がりつつある震えに飲まれそうになっていた。

「あのさ……俺と、ちゃんと会話して？」

言われた言葉の意味が分からず、思考が止まる。

「ごめん、触るよ」

強く言い切った一言と同時に、頬を掴まれ顔を挙げさせられていた。ぐいっと、いつもの高原とは違う乱暴な手付きで更に目に掛かる前髪をどかされた。

「君の言葉さ、ただでさえ分かりにくいんだよ普段から。今の言葉は違うつて今思ったでしょ、自分で。そういう時はそう言うんだよ、今は違うつからって。どうしよううつて俯くの止めてさ」

一気に核心を突く事を言い当てられて、俺は息を呑んだ。怒っているんだろうか、口調すらいつもとはきつく、高原は続けた。

「どうして俺が目の前にいるのに、自分に話し掛けちゃうの？ なら俺いらんないじゃん。大体さ、自分の中でだけ自問して、答えなんか出るの？ ぐるぐる堂々巡りするだけなんじゃないの？」

……何も、言えなかった。今迄にない迫力に、目を反らす事も許されない気がして、俺はなるだけ脅えを隠しながらに高原を見つめていた。

不意に天を仰いで、はあつと高原は溜め息をついた。次いで戻ってきた顔が、俺を見て、近付いて……

ーぴたつと額を合わせられて、俺はびくつと全身を震わせた。高原は今は目を閉じている、閉じてはいるけれど、近い、一転して小さくなった声の放つ息すら掛かる程に。

「……ごめん、取り乱した。今日はさ、何か説教くさいよね俺。嫌われたくないから言っちゃ駄目だつて思ったんだけどさ、言わずにいらなくてさ。嫌われてでも言うのが友達だしね」

ずきん、とそれは心を揺らした。ぱちつと高原の目が開いた、――恥ずかしさではなく、何か強い気持ちに包まれた様な不思議な感覚で、俺は高原を見返していた。唇すら触れてしまいそうな近さにも関わらず。

怯まない俺を見て、高原の目がいつもの優しさに細められる。すうつと頬の手と共に額が離され、高原が遠去かる……待つて、などと危つく俺は言いそうになってしまっていた。

そうして、何か縋る気持ちにでもなってしまったのだろうか、離れる高原との距離を埋めでもするかのように、無意識に俺は高原に身を近付けていた。

「ん？」

はっとして直ぐに体を戻したのに、目聡い高原には気付かれてしまったらしい。

「どうしたの？」

「分、分からない……」

ああ迄言われた直後だ、黙ってやり過ごす事は出来なかった。けれど今の自分の行動は余りに衝動的で唐突で、本当に説明が出来そうにないのだ。困惑のままに、俺は繰り返すしかなかった。

「分からない……」

「うん。俺にもよく分かんないけどさ」

とろりと、眼鏡の奥の高原の目が甘く細められていた――お馴染みの危機感を覚えて、俺は身構える。それより先に、素早い高原の手に引き寄せる様に抱き締められてしまった。また……！

「今のは、橘が悪いんだよ」

耳元に、囁きで告げられる。驚きに、俺はもがこうとする。封じる強さで、高原は続けた。

「離れないで、って顔した。自覚、ある？」

……不覚にも、それには思い当たってしまう。無意識に近付いたりなんかして、きっと今自分はそんな不安定な顔をしていた、のだから、と思う。とは思っけれども。

ひっそりと隠れる様な場所、人通りがない事からこの場所を家として選んだのは自分で、今も誰一人周りには居ないけれども。

恥ずかしさは幾度同じ事をされようと変わらない、俺は必死で暴れた。意外とあっさりと腕を緩めてくれて、すんなり俺は高原の胸元から身を離す事が出来た。残念そうに、高原が呟くのが聞こえた。「あーあ。さっきのものの欲しそうな顔、も一度見たかったのにな」

きつと、羞恥を隠す為に強い目を高原に向ける。相手が望む様な顔とは程遠い様に。

何か言いたかった、何か抗議してやりたかった。今は自分の油断だとしても、今高原を触発したのは自分なのかも知れないけれど。「と……友達なのに、何でこんな事するんだよ?! 俺が嫌がるの知ってて」

答えを聞くのが恐ろしい質問を、敢えて俺はぶつけてしまった。考える事もせずに、高原が即答する。

「君の反応が可愛い過ぎるから。条件反射みたいなもんだから、俺にも止められないんだ」

「……ふざけるな」

らしくなく、声を荒げてしまう。俺が初めて怒りを顕わにするのに、高原は真剣に向き合ってくれている様だった。からかう色をなくした声が、一瞬で切り込んでくる様に告げた。

「君に足りないの、自信でしょ。人前で顔を挙げて何か言う勇氣。わざと他人との接触を避けてる限り、直らないよね。俺のやり方も荒治療だと思つよ、でも君の心を開く取っ掛かりにはなると思つんだ。君の心を開きたいんだ、俺。君は大事な友達だからさ」

俺の下らない虚勢など吹き飛ばす様な、高原の言葉。強気は早くもぐらつき、俺は高原に押される形になっている。まごつき言葉をまとめられない俺に、高原は静かに続ける。

「多分人より沢山の事考えてる。なのに一つも口には出さない。それって周りからするとどかしいし、勿体ないと思うよ。いっぱい話してよ、俺に位は。色んな気持ち教えてよ」

……どうしてそんな優しい声で、慈悲に満ちた顔で。泣きそうになるのを俺は必死で堪えている。ここで泣くのは振り出しに戻る事だと、俺には分かっている。さすがに、気付いている。

だから、俺は毅然と顔を挙げてみせ、高原を見つめた。

「……分かった。努力する」

俺の精一杯を受けて、高原は実に嬉しそうに笑うのだ。

「うん。今みたいだね」

小さな俺の一步を、高原は絶対に見落としたりしないんだろう。

視界に高原の手が伸びてくるのが映る、いつもなら脅えてしまう肩を今はぴくりとも揺らさない様に、俺は体に力を込める。

それも含めて讃える様に、高原の手が柔らかく俺の頭を撫でる。

矢張り澄んだ優しさが流れ込んでくる、……相手が手を下ろす迄の僅かな間、俺は心が洗われる感覚に身を浸す事が出来ていた。

互いに口は開かなかった、漂う空気は今迄と違い、何と言うのか

――信頼に満ちている、と俺は思った。高原の行動の真意、根底にあるものが理解出来た様で、今から幾度高原の突然の抱擁を受けようと、自分はもう逃げずにそれを受け止められるかも知れない、と俺は思った。……今日は、もう限界だけど。

沈黙を、そつと俺は破った。

「今日は……色々有難う。うち、ここだから。頑張つてメールするから」

じゃあね、のつもりの言葉は、最後の一言が多分に高原を笑顔にさせたらしい。

「分かった。――待ってる」

頷いて、歩き出す高原を見送る。何度も振り返る高原に向けてその度に小さく手を振りながら、少し照れくさくなって俺は考えている。友達より上、親友、だと思ってもいいのだろうか……大事な、大切な親友……

四

そうして、携帯を前に悩む事数時間。未だ初めの一文すら決められず、日付が変わってしまいそんな気配に、俺は焦る。

な、に、を、送れば、いいのだ……？ 『これから宜しく』とか？ 『今日は有難う』とか？ その続きは？ 大体、絵文字をどうやって出すのかがもう既に分からない。

今日一日ー濃かった、と思う。消化しきれない程沢山に凶星を指された。不思議と少しも嫌じゃない指摘を。

感謝の思いを伝えるべきだろうか、と考えた。恐る恐る、俺は文字を打ち込んだ。何度も考えては消して。

ー時間でだけ言えば今日のうちに、何とか送信する事が出来た。自分の今の精一杯の気持ち。恥ずかしいけれども。

『高原に声を掛けてもらってから、嬉しいのと楽しいのでいっばいです。感謝してます。高原を苛々させたりがっかりさせたりしてしまう事たくさんあると思うけど、おれ至らないやつだけど、これからも友達でいて下さい。おれの大親友へ』

……大して間も置かずに、携帯が鳴った。教えられたとおりに受信メールを開く、高原からの返事ー『俺も橘に出逢えた事を神に感謝してます。橘といると、俺も嬉しくて楽しくて幸せだよ！！ワクワクする（＾o＾）でもあんまり俺をドキドキさせないでね。生涯の親友より。おやすみ>（――）<』

慌てて『お休みなさい』と返信メールを送る、『明日絵文字教えてあげるね。おやすみなさい！ 終われないから、もう返信しなくていいよ（^^）』との返信もまた直ぐに届いた。

布団に潜りこんで、携帯の画面をいつ迄も眺めていた。最初の高原からの返事。「神に感謝」「幸せ」「生涯の親友」ー自分の言葉をどれも微かに上回る言い回し。

高原はきつと、俺の想像も及ばない程沢山の人達と交流を深くし

てきて、どのタイプの人間にはどう接すればいい、というのが自然に分かる様になっているのだろう。俺なんかを喜ばせるのなんて、目を瞑っててもこなせる位に。

それでも、嬉しくて何度も文字を目で追っている。生涯の親友、それに至っては實際口に出してしまつて迄。

消してしまわない様に、明日は一番に保存の仕方を聞かないと。明日、当然の様に高原はメールで言ってくれた。明日。

……恋、してしまつたんだろうか、とちよつと焦る。異常かも知れない、この「好き」は。ーいや、違う、と俺は必死で否定に頭を振った。好きだけど、そういう好きじゃない。憧れだ。優しく強い人に対する。安心だ。羨望。尊敬。他人を避けてきた俺には眩し過ぎるから、特別に思う気持ちも大きいだけで。

親友だ。そう言い聞かせるのに、自分はすんなりそれを受け止めた。……そう、それ。おかしい気持ちなんかで接して、高原に嫌な思いをさせる訳にはいかない。大事な親友なのに。

気が落ち着いた処でまた、目は画面の中の文字をなぞっている。既に覚えてしまつた七行を。

いつ迄も。

授業中なんかに見て没収される馬鹿な目には遭いたくない。周りの好奇の目も気になるから、見たいけれども授業の合い間の休憩時間も我慢した。四時限目が終わると同時に俺は弁当なんかより先に携帯を取り出し、皆が余り使わない体育館近くのトイレに閉じ籠もった。

高原からのメールが、一時限目の後の休憩時間に送られてきていた。『今日はどこでお勉強する？ 図書室裏？ 公園？ 思い切つて俺ん家来ちゃう？！』

……目の前でそれを言われていたら、慌てるどころじゃなかった。

表情や声を相手に知らせないメールに改めて感謝しながら、俺は「すっかり教えてもらいたいから、図書室の裏はまずいと思う。公園がいいかな。宜しくお願いします」とだけ急いで返信した。

高原からの返信は、驚く程早く届いた。「OK」先生頑張っちゃうからね 放課後、靴箱の辺りで待っててね」……「了解です」……「楽しみだね。早く顔を見て話したいね（^^）早く放課後にならないかなあ」

順調なやり取りを、そこで俺は返事に困って止めてしまった。そうだね、とか本当だね、とか、或いは俺も楽しみだよ、などと軽く返せば何の問題にもならないのだろうけど。

……返事を返さない携帯に、高原からの次のメールはなかった。終わりだと自分で勝手に決めて、俺は携帯を閉じる。

踏み込み過ぎたやり取りは、慣れない俺には呼吸困難を引き起こしていた。どう対応すればいいのかわからない。折角相手が近付いてくれているのに。親切を「追い詰める行為」にしか、俺は受け取れなくて。

……期間にしてみれば短かったけれども心に深過ぎる溝を落とした事件を、今改めて鼻先に突き付けられた様な、背筋を凍らされる様な感覚。自分では心を開いたつもりでいたのに、高原を信頼して安心していたつもりなのに、少し相手からの距離が短くなっただけで、途端に硬直して身動きが取れなくなっている――

壊れる程の力で、携帯を握り締めていた。意図した力で。壊れても、いい……壊れてしまえばいい――

――俺が、壊れる前に。

帰ってしまおうか、と逃げたがる思考の一部が囁くのを、意味がない、と俺は諭す。高原は俺の家を知っている、もしもやって来られて中で話そうだなと家に入る事を迫られでもしたら……

それに大体、勝手に頭をごちゃごちゃにしているのは俺だけだろ
う。返信がないからと高原がいちいち気に掛ける様なやり取りでは
なかった筈だ、きっと高原は俺以外とも多数のメールのやり取りを
している筈だから、あんな取るに足らないやり取りに気を取られた
りはしないだろう。

納得させようとするのに、意見を拒絶する一部が俺の中にある。
考えが深みにはまりそうだと俺は目を閉じて長い息を吐く。直ぐ
に開いた目の先、一瞬にして現れた高原に、俺はびくつと肩を跳ね
させる。

につこりと笑って、高原は言うのだ。

「ちよつと会わないと、すぐリセットしちゃうんだね。きつつい
調教が必要なのかな？」

聞きようによっては恥ずかし過ぎる台詞に、俺はあたふたして、
人の気配もない周囲に目を遣る。わざとに俺を翻弄してくれたのか、
くすりと心底楽し気に笑ってから高原は俺を促した。

「行こうか」

……ふざけているのか真面目なのかよく分からない、と俺は思う。
ただど矢張り昼の途切れたメールを高原は気にも留めていないらし
い、と思つて、俺はほつとした。

気が緩んだせいなのか、不意にふらつと俺はよろめいた。久し振
りの立ちくらみ、止められず倒れそうになる体を咄嗟に靴箱にもた
れさせようとした俺の体は、がっしと力強い高原の腕に抱き留めら
れた。

さすがに下校時間の校内だ、俺がしっかり立つのを見届けて、高
原は素早く俺から手を離してくれた。心配そうな声が、間髪入れず
に降ってくる。

「顔色、悪いね。何かあった？」

急いで、俺は首を横に振る。原因は多分に明らかだ、慢性的な寝
不足と、考え過ぎと昼食を抜いた空腹のせいだ。けれども黙ってい
ては伝わらない事に気付き、小さく俺は言ってみた。

「ごめん、大丈夫。お昼食べ損ねたから、ちょっと立ちくらみしただけ」

口を開き掛けた高原が、どこか違う場所に視線を動かしてから俺の腕を取った。

「……とりあえず外に出よう。クラスの奴らが来た」

――引つ張られる様にして歩きながら、内心複雑な思いだった。昨日はわざと皆に俺を紹介するみたいに見せたのに、今日は見付からない様になっている。結局は俺と一緒に居る所を、皆に知られたくないんだ……。

校外に出て直ぐに、掴まれたままの腕を、俺は勢いよく抜き取ってやった。乱暴な俺の仕草に、気付いて高原が声を落とした。

「ごめん、いつ迄」

ぶつりと途切れた言葉、高原らしくない不自然さ。反射的に顔を見てしまいそうになって、意志の力で俺はわざと高原と反対に顔を向けてやった。

「……橘。拗ねてるの……？」

驚いた様なその表現は、俺には不本意だった。言い聞かせる様に、俺はゆっくり言ってやった。

「拗ねてない。怒ってる」

「その言い方も、拗ねてるよね。可愛い……」

かつと頭に血が昇った。ぎゅっと唇を噛み、俺は高原を振り切る様にうる覚えの公園に向けて歩き出した。そんな手首を、緩く高原が掴んできた。

「橘。公園やめよ」

ぱつと手を振り払った俺は、口調も強めに言葉を投げていた。

「じゃあ、帰る。携帯の使い方位、自力で何とかする。あんたの教えは要らない」

「橘……」

本気で、俺は帰ろうとしていた。方角が分からないなりに足早に歩き出した俺を追いつけながら、手は出さずに、高原が呼び掛ける。

「何でそんなに怒ってるの？」

隠しきれていない面白がる響きに、更に俺の苛立ちは募る。無視を、俺は決め込んだ。懲りない高原の問いは続く。

「初めてだね、そんなに感情はつきり出すの。俺に心開いてくれるとっていいのかな？」

学校から出て左に歩いて来た、今は右に向けて歩いているから、距離的にもう学校が見えてもおかしくないのに――道が違ったらしいと俺はぴたりと足を止めた。高原には知った道なのだろうか、それとも俺をからかう事に氣を向けているせいで、道などどうでもいいと思っっているのだろうか。

帰ると豪語した以上、高原を頼りたくはなかった。今来た道をまた逆に歩いてみよう、と俺はくると体の向きを変えた。高原の強い手が、後ろから俺を引いてきた。

「ねえ、橘ってば。何を怒ってるのか教えてよ……」

柔らかな囁き、強く引く力にバランスを崩し、俺は背中から高原の胸にぶつかる。そんな体勢で後ろから俺の胸元で手を組み合わせ、高原が俺を包み込んだ。

条件反射で暴れようとして、ふと俺は挙げたばかりの手を下ろす。

……高原は今日、俺と居る所を隠そうとした。ならこんな体勢、困るのは俺じゃなく、高原の方じゃないのか？

熱い息が、首筋に掛かっている。必要以上に密着した体を、出来れば今直ぐにでも振り解いてやりたいけれど――いつ迄も俺が動かないのに驚いた様に、高原が真面目な声音で尋ねてきた。

「橘……誰かと入れ替わっちゃった？」

どこから出る発想だ、と俺は呆れてしまう。それを言うなら今日の高原も不可解だ、となどと考えていると。

胸の前で組み合わさっていた高原の手が、俺の肩に移動しぐいと回す様に力を込めてきた。抗えず、くると俺は高原の方を向かされてしまった。

逃げを許さない様に、肩から手はどかして貰えないまま。近付けられた高原の顔に、何だかいつもと同じ状況に、焦って俺は口を開いていた。

「こっ……こんなとこ見られたら、困るのあんただろ!!」

ん、と高原がやや顔を離す。肩の手を外させたくて高原の腕を押しやる様に力を入れながら、俺は更に、噛み付く様に言い募った。

「俺と居るとこ、クラスの人に見られたら嫌だから逃げたんだろ？
なのにこんなっ」

――予期せぬ言葉を耳にしたと言う顔で、高原の手が俺の肩から外れた。橘、と囁く甘さが聞き慣れたものに变化しているのに、俺は身構え体を逃がそうとした。

……した、のに。引き戻された延長のままに、がばと抱き締められる――まるでいつもと同じに。

どうしてこうなるんだ、と俺は闇雲に暴れた。高原の意図が分からない。俺が怒っている事を知っていて、何故嬉しそうに破顔するのだ。何故……いつもよりも慈しむ表情を深めた様に。

抵抗毎俺を封じて、高原が息をこぼしながら囁きかけてきた。

「可愛い誤解……それ、何て言うか知ってる？」

問い掛ける形なのに、俺からの返事は求めていない。ぎゅうつと、骨迄砕かれそうな今迄で一番にきつい力で俺を抱き締めてから、唐突に高原は俺の体を解放した。

「嫉妬。独占欲。……嬉し過ぎ。橘、俺の事特別に思ってくれてるの？」

今この状態での解放は却って地獄だ、隠せない羞恥で真っ赤になっっている顔を直ぐ間近から高原に覗き込まれるこんな状態は。おまけに何がどうなってそんな解釈なんだか、目が回る様な思いは実際に俺の体をふらつかせた。

言い返してやりたい気持ちやもつどうでもいいと諦める気持ちが交錯して、俺は目を閉じた。……誘う闇の中に、そうして俺は身を委ねていた。

頭を撫でる優しい手が与えてくれる安心感。心地好さが、暖かく胸に拡がる。この手の感触を、もう俺は覚えてしまった。全てが優しい高原の、笑顔も掛けられる言葉も抱き締める腕も総て根本に優しさを有した、高原の――

――がぱつと飛び起きた、まず反応した体の後で、追いつけない思考が作る隙間に高原の言葉が滑り込んできた。

「無理しちゃ駄目だ。また倒れるよ」

また、と言う事は先程、俺は意識を失い倒れたのか、と気付く。

自分が今居るのが見慣れない部屋の中のベッドの上で、寝かされていたらしい事から恐らく高原の家にでも運ばれてしまったらしい事迄を瞬時に察知し、頭に鳴り響く警鐘から静かに俺はベッドから降りる。体を支えようとしてか伸ばされた高原の手から遠去かる様にして、背中を壁に預けて立つ。

明らかに尋常でない警戒を顕す俺に気付いていて、高原はそれには触れないままに心配そうな言葉を掛けてきた。

「まだ寝てるとは言わないけどさ、もう少しゆっくり体を休めた方が」

相手の言葉の途中で、俺は体をずらす様にして部屋のドアに近付いた、ノブに手を掛けようと伸ばした俺の手は、素早くドアとの間に身を晒して立ち塞がった高原の腰先にぶつかった。

反射的に手を引っ込める俺に、ドアを隠す様にして高原が、わざとにか明るい声を出す。

「まだ帰っちゃ駄目。話したい事いっぱいあるでしょ、お互いに」
「俺はない」

被せる様に、低く返した。高原には分かっている筈だ、脅えた人間から逃げ場をなくせばどうなるか――余計に心を閉ざす筈だと、折角の高原への信頼を俺が手放す筈だと。

なのに敢えて、高原は強行手段を取った。いつもの柔らかな相手の笑みすら今は繕ったものに見えてしまう俺に構わず、不意に高原がその場に座り込んだ。俺を見上げて、高原は静かに言い出した。「一つ、約束する。ここに居る限り、俺は絶対に橋に手を触れない。いつもみたいな困らせる事はしない」

……俺が困ると知っててやってたのか、と思わず考えがそこに向いてしまったが、はっとして俺は更に背筋を伸ばし、唇を噛んできつと高原を睨んでみせた。俺の強い目を受けて、高原は続けた。

「呼んでも全然ぴくりともしないし、あんまり顔色が悪いからさ、怖くなって、つい俺の家に運んじやっただ。目を覚ましたら橋、こういう反応する事分かった。でも、寒い公園なんかに寝かせておけないじゃん。そっちのがもっと密着した膝枕とかになってたよ。人にも見られるし。そうすれば良かった？」

言われた光景を頭に描き、想像なのに赤くなる。確かに高原の言葉が正論なのに、元々は自分が倒れた事に原因がある負を俺は自覚し、渋々ながらこの状況を受け止めようとしてみた。からかいの響きを消して、高原が言う。

「昼飯一回抜いた位で倒れる？俺が無理矢理委員にさせたり色んなとこ連れ回したり、変な事したりするから、橋の事精神的に疲れさせちゃったんだよ。さすがに反省したよ、俺。だからちゃんと謝りたくてさ」

言って、高原が頭を下げようとするのに俺は気付いた。何故だか焦って、俺はそれを止めようと口走っていた。

「ごめ」

「悪いの俺だから！！高原が謝る事ないっ」

無意識の行為だった。そうして、俺は座った高原の目の前に駆け寄る様に近付き、しゃがんで言葉を続けていた。

「反省するのも謝るのも、俺の方だから。高原が優しいのに、甘えてる俺が悪いんだ。いっぱい考えてくれて、気に掛けてくれて、俺本当に高原に感謝してる。悪いとこ教えて直そうとしてくれてんのに。俺の方が」

咳き込む様に一度に喋ってしまったて、唐突に言葉を止める。自分から近付いてしまった事に思い至り、おずおずと身を遠去ける。手を触れない、と誓う様に言ってくれた高原は、動かず優しく俺を見つめていた。

羞恥に飛び出してしまいそうになる気を抑えながら、離せるだけ身を離れた位置に体を止めて、もごもごと俺は言葉を閉めた。

「……俺の方が、高原を疲れさせてる。ごめん」

にこりと、いつもの柔らかな笑みを高原は浮かべて。

「俺がどれだけ橋に癒されてるか知らないでしょ。どんな橋も好きだけど、脅えて謝る橋は俺あんまり見たくないな。もう言わなくていいよ」

………という環境がこんな優しさを人に抱かせるのだろう、と思う。頑なに心の一部が確かに溶かされていくのに、俺は気付いていない――安心に比例して立ち上がる、消せない奥底の警戒を自覚しながら、だけれど。

黙った俺に、高原の台詞も途切れた。なのに身を隔てた適度な距離の心地好さ、高原は空気迄柔らかかに変える能力を持っているらしい。

身を沈めてしまいそうになる自分の油断を戒めるつもりで、俺はそつと口を開いた。

「話したい事、沢山あるって。……何？」

大して考えもせずに、高原はさらりと返した。

「んー。ある事はあるんだけどね。でももう何か大体分かつちやったしさ。今日は俺橋に触れないしね。だからまた今度でいいや。今日はさ、携帯の使い方講座にしよ」

色々、何か気になる処のある台詞ではあったが、気にならな

った振りをした。俺は頷いた。

帰ると言ったのに、「折角たくさん作ったんだから」と高原母に優しく促され、「仕事なんか放り出して早く帰宅してやった」と言うお姉さんに囲まれ夕食をご馳走になる。人との距離が分かった様に静かに寄り添ってくる、賢そうなレトリバーの『はなちゃん』に気に入って貰えたのも、嬉しい限りだ。

「まだちゃんと覚えてないだろ？ どこ迄理解出来たかテストしてみよう」と熱血教師と化した高原に質問攻撃を受けながら、遅く迄俺は居心地の良い高原家にお邪魔したままだった。

お姉さんの『たつての願い』で車で家迄送って貰ったりして、何だか至れり尽くせりな一日だった。眠りにつく迄に交わす、『親友』との『他愛のない』自然なメールのやり取りにもようやく慣れて、毎日が充実している。

俺から高原に何か返せる事はあるだろうか、と最近はそればかりを考えている。俺が高原から貰ったものは、余りに大きく尊い。総て今後の人生をいい方に左右する程に。

高原が喜んでくれそうな事。もし尋ねれば、きつとふざけてぎゅっとさせるとか誤魔化されて、真意を測れずに終わってしまいそうだ。

自分で考える事に意味がある、と思う。これからも付き合いが続くなら、一つ一つの高原の言葉を考えをしっかりと噛み砕いて受け止められる様にならないと。

そう自分に難解な課題を課す事が苦痛ではないのに、内心俺は戸惑っているのだった。

五

一見して、タチが悪いと知れる人達だった。四方を各々に囲まれて立たれ、俺はぎゅっと握った拳に力を込めた。

「橘つての、お前？」

正面の一人が、ぞんざいに尋ねてきた。どうにか目を反らさず相手を上げる事に精一杯な俺に、頷く度胸がある筈もない。ぐいつと乱暴な手に前髪を掴まれ、後ろに引つ張られた。のけぞった俺に顔を寄せて、手を離れた相手は下卑た笑いを吹き掛けてきた。

「口が聞けないの、ボクー？ それとも耳が聞こえないのかなー？」
ぶつ、と周りの三人が笑う。口々に、そいつらは言葉を放ってきた。

「噂どおりじゃね？ 顔的に」

「分からんではないな……」

「俺はありだな」

最後の奴が、俺の頬をがっしと掴んで自分の方に向けさせた。舐め回す様な眺め方に、俺はぞつとする。

……頭の中が、真っ白だった。威圧される事は忌まわしい過去を呼び醒まし、俺の足を竦ませる。体を逃がす事も何か口にする事も出来ず、細かに震え出した肩が不意に跳ねてしまわない様に、俺はそこに意識を向けていた。

なのに、そこを攻撃対象にされてしまった。頬にあつた男の手が、いやらしく首筋を辿り肩に載せられる。びくつと体が弾み、反射的に目を閉じてしまった俺に、男達は面白がる響きの台詞を投げつけた。

「あれれ、かつわいいー。観念すんの早過ぎじゃないの？」

「つーか弱過ぎだろ」

「人質としちゃ、最高だな」

はははっと笑いが重なる、必死の勇気で俺は目を開けた。人質ー

「不吉なその一言に、一際高く笑う先程真正面から髪を掴んできた男にどうにか視線を定めて、俺は震えを押し殺した声をこぼした。

「俺に、何の用……？」

怖かった、震えは今や足に拡がり、膝をかくかくとさせていた。それでも脅えを隠して毅然と映る様、俺は目線を強く保とうとしていた。

へえー、などと男達は無遠慮に近くから俺を眺めたり、背中側に回り込んで観察する様に俺を見たり、と好き好きに動きながら。

「ここで強がれるだけ、見込みあんじゃねえの」

「これは是非お持ち帰りして確かめたい限りだな」

「何をだよ」

「高原みてえにかよ」

げらげらと笑うそいつらから発せられた名前に、俺はぴくつと反応しかけたー正にその瞬間に、そいつらとの間に立ち塞がる様に、第三者の背中が俺の前に現れた。

突然割って入ってきたその誰かに、男達の空気が剣呑になる。

「噂をすれば、だな」

「正義のヒーロー見参ってか？」

「姫を守る王子様、だろ」

俺を庇う様にして立つ高原の方に、男達の関心は移った様なのだ。迫る近い位置の男達を見回して、高原はこの場の緊張にそぐわない、いつもの穏やかな声を放った。

「昨日の今日で、手が早いね君達。弱いところにすぐ攻撃向けんの、ハイエナ並みだね」

「何をっ?!」

「てめえ、調子に乗んじゃ」

「まあまあ」

いきり立つ仲間を押さえたのは、正面に立つ男だった。リーダーらしいそいつが、一步出て高原に近付き、触れそうな程に顔を引っ付けた様に見えた。高原の表情は見え、だけど漂う気配は先程迄

と違い、俺にでも分かる程冷たく冴え冴えとしている。そんな高原をからかう様に、リーダーの男は言葉を落とす。

「お前の大事な仔猫ちゃんを、一目拝ませてもらおうと思ってな。俺達とも仲良くさせてくれよ」

「うわっ」

つい、声を挙げてしまった。四人の中では比較的まともな意見を述べていた一番体格のいい男が、高原の背に隠れる様に立っていた俺の手首を掴み、ぐいつと陰から引き出す様に引っ張ったのだ。

ちらりと視線を投げて俺の姿が無事だと確認したのか、高原は顔を寄せたリーダーに向けて鋭い声を放った。

「勘違いしてるよね。俺あんたらみたいな趣味ないよ。っーかさ、俺に何かしたいんなら俺だけを狙えよ」

さらりと凄んだ最後の言葉の威圧に、リーダーは楽しそうにやりと笑う。そいつが何か口を開こうとした時。

風のように、高原が動いた。まだ俺の手首を掴んだままだった男の前に現れた、と思うや否やその身が沈み、次の瞬間、柔らかに俺の手から男の手は外され、大男は両膝を床につく形にどさっと体を落としていた。俺に対し好色な目線と言葉を投げていた男が瞬時に動き、高原に掴み掛かろうとする、どう動いたのだから見えない内に、男は薙ぎ払われた様に大きく後ろに吹っ飛んだ。どっちつかずの意見で立ち回っていた第三の男が立ち尽くす前に高原は身を翻し近付いて、何が起きたのか男は腹を庇う様に身を丸めながらその場におれた。

はあっと、高原が面倒臭そうに一つ息をこぼしたのが、俺には見えた。次の瞬間には、目を剥くリーダーの目前から高原はその胸元に入り込み、と思うと一瞬で、すっと背筋を伸ばして立った高原の前、リーダーの男はよろめく様に膝をついた。

言葉を発する事すら出来ないのか、喘ぐ様に息を大きく吸い込む事を繰り返すリーダーの男に興味のなさそうな視線を投げて、高原は小さいくせに迫力充分な声音で告げた。

「時期図書委員長候補の優秀な人材に、ちょっかい出さないでくれる？ 君達とは住む世界が違う人なんだよね」

僅かにずれた眼鏡を、くいつと上げてみせて。戦闘不能の四人が動かないのを冷めた目で見渡してから、高原はうって変わった優しい笑みを俺に向け、促してきた。

「行こうか」

「たつ……高原、凄かった!!」

「えー、本当？ 有難う」

「あんな強そうな人達一瞬で……何か格闘技でもやってたの?!」

「そんなのしてないよ」

「してないのに、あいつら倒しちゃったの?!」

「橘大袈裟だつて」

謙遜しながら、高原は嬉しそうなだった。いつになく語尾が甘えた様に伸び、褒めると言わんばかりの顔をしている。俺としてはベストの処を助けられた訳で、怖かった反動やら高原の意外性の驚きやらの興奮もあり、まだ続けずには居られなかった。

「高原、すっごい恰好良かった!! 強いし、堂々としてたし、息も乱してなかったし、あんな怖いの大勢なのに怯まないし!!……あつ、助けてくれて、本当に有難う」

慌てて口走る。最後の一行を一番初めに言うべきだった、と焦る俺に、いつの間に着いていたのか久々の公園の椅子に腰掛ける様に高原は示し、やや表情を引き締めた感じに言ってきた。

「うん、危なかったね。あいつら直接君を狙いにきた」

椅子に座りながら、俺は戸惑いからつい聞き返していた。

「知り合い?……じゃないだろうけど、知ってたの? 俺がからまれるって事」

責めたつもりなど全くないのに、高原にはそう聞こえてしまった

らしい。先程迄の昂ぶりは極端に身を潜め、高原はらしくなく目を落とした。

「……ごめん。実際あんなすぐに手を出してくるとは思わなかったんだ」

口を挟める雰囲気ではなく、俺は黙って高原の言葉の続きを待っていた。言いくそうに、高原は言葉を組み立てる様に一つ一つをゆっくりと口にした。

「あの不良達、元々俺を目の敵にしてたよね。何かある度にいちいち絡んでくるし。適当に受け流してりや過ごせてたんだ。あんな風に直接向かってくる事は一度もなかったからね今迄。よっぽど橘が俺の弱点だっと思ってたんだろうね。まあ実際そのとおりなんだけどさ」

何と返答をすればいいものか俺は困って、じつと高原を見上げていた。高原の探る様な、どこか自信なさ気な目が俺を捉え、言い聞かせる様に続けた。

「昨日、靴箱で逃げただろ。あいつらに見付かりたくなかったからだ。基本は、俺橘を皆に見せたいからね。自慢して、見せびらかして、いいだろーってノ口けたいからさ」

「のろっ……」

気になった単語をつい復唱しようとして、俺はむせた。大丈夫、などと高原が、自分のせいなのに俺の背をさすりながら言ってきた。「……俺のせいで、橘怖い目に遭わせちゃったね。ごめんね。何もされなかった？」

劣る優しさなんだ、と高原の近付いた顔を間近に受け止めながらも、俺は内心ときどきしてしまうのだ。大人しい文化系だと思っていたのに、あの圧倒的な強さ、無駄のない華麗な立ち回り。頷いた俺の発した声は、かなり小さなものだった。

「平気……高原助けてくれたから。ごめん、俺知らなくて、昨日も守ってくれてたのに逆に怒ったりして」

「ああ、拗ねてた事ね」

「すつ……怒つてた事！」

つい訂正する俺のツツコミが早かったせいか、高原は実に楽しそうに笑って。

ふわりと伸びてきた手が、俺の頬を優しく包む。先程男に乱暴に掴まれた事を思い出し、無意識に緊張する俺に、直ぐ正面から高原の真剣な視線がぶつけられる。

「ーどんな形であろうと、君を狙う奴は俺が排除する。君に触れようとする奴は、二度とそんな気を起こさない様に痛めつける。君の事は、俺が守る。全身全霊を賭けて」

有難う、などと気軽に返せる内容ではなかった。ごくりと息を呑む俺を暫くそうして見つめてーはつとした様に、高原は慌てて俺の頬から手を離し、顔も遠退けた。

動揺を隠す様にか僅かに下向けた顔を直ぐに挙げた高原は、もういつもの穏やかな高原だった。だけど俺は、高原の言動がなにか匂わせる、俺の心の奥底の癒されない闇に関わる様な感覚に、警戒を張り巡らせていた。

もし今また触れようと伸ばされたとして、俺はそんな高原の手を強く拒絶するだろう……それは態度に表れていたらしい、離れた位置に距離を置く高原は、空気を和らげる様に笑ってみせた。

「俺さ、自分に何かされんのは平気なんだけどさ、自分の関係した人に何かされんの一歩許せないんだよね。もしとばかりで橘が酷い目にでも遭ったらさ、俺一生掛けても君に償いきれないって思うもん」

「……」

……何か、返そうとした。けれど明確な言葉は思いつかず、視線をよそに漂わせる俺に、小さく高原が呟いた。

「ごめんね。またこんな事があるかも知れない。君は……何て言うか、人気者だから。でも俺がちゃんと守るから。俺が君のガードになる。だからなるべく俺の傍にいてね」

さらりと、何だか色々な事を凝縮させた様な台詞が告げられた。

最後の一言に思わずかあつと赤くなつて、余りゆつくりとそれを考えられない内に、高原はそうそう、と何やら鞆を探つて何かを取り出した。

「知つてた？ 橘さ、明後日初の図書当番なんだけど。生徒会と被るから俺ついてあげられなくてさ、親切で丁寧な先輩に任せてるんだけど。明日と当日と、二日共指導してくれるって。色々詳しく教えてもらつてね、そんなに難しい事はないと思うから」

がらりと変わった内容についていけずに戸惑う俺に、はい、と何やら分厚いファイルを手渡して。

「付箋ついてるページ読んでくれたらすぐ分かるよ。橘よく本借りに来てたし、楽勝だつて」

恐る恐る受け取りながら頷いて、俺は尋ねる。

「コピー取るから、これ暫く借りてていい？」

「それもうコピーしたやつ。橘用に作っちゃった。ずっと持つててね、大事な図書委員のバイブルだから」

「あつ……有難う」

驚きに、無駄に大きな声で答える。どつしりと重いファイルをぎゅつと胸元に抱える、付箋迄付けてくれて、大変な作業だっただろうに、わざわざこんなー！。

「わざわざ……有難う」

また繰り返す俺に、高原は何でもない様に笑ってくれるのだ。

「うん。……やっぱさ、明日一緒に図書室行こ。俺も教えてあげる。サボり方迄はさ、先輩教えてくれないからさ」

茶目っ気の溢れた笑い方でもって明るく言われて、俺に断れる筈はないのだ……。

一日の予行演習を経て、当日本番。受付業務の合い間に本の並びや不足分のチェック、隅々迄の雑巾がけ、本の日干し、校内新聞に

載せる為の推薦書の選出とその書評、自習時間などに薦める為に教師に渡す教育に役立ちそうな本探し、――意外とする事は多く、指導されながらの一日はあっという間に終わった。

生徒会が終わってから駆けつけてくれた高原に誘われ、帰り道に『安くて美味しい』ラーメン屋に寄ったりして、『極普通の学生生活』なんかを俺は味わっている。

――底なしの闇だった夜が、気付けばわくわくするメールのやり取りの至福の時間になっている。高原の言動が、俺の原動力になっていた。偽りのない笑顔が。真摯な態度が。

俺の心の鎧を、確実に溶かしてくれていた。

「……騙された……」

歩く道中ずっと繰り返す、時々には恨めしい目で睨む俺を、高原はにこにことした笑みでかわしていた。

「お姉さんのケーキをご馳走になりに来たんだ」

強調する意味で、わざとゆっくり俺は言う。

「食べ物で釣るなんて、卑怯だ。断るものも断れなくなる」

「んー？ でも別に、交換条件としてそうさせるとか強制した訳じゃないしさ」

「それは、そうだけどっ……」

「逃げる隙いっぱいあったのに、逃げなかったの橘じゃん？」

「……っ」

言い返そうとして、自分の抗議に力がない、苦しい言い訳じみた主張になるのを自覚して、俺は口をつぐんだ。……確かに、逃げようと思えば逃げられた。嫌ですと断固拒否する事も出来た。なのに、ぐずぐずと断れなかった自分が悪いのだ……。

そんな自分の優柔不断ぶりに落ち込みかけた俺の髪に――切られたての、短か過ぎる髪の毛にすつと手を触れて、高原は言うのだ。

「似合うだろうとは思ってたけど、正直予想以上だよ。そこらのアイドルなんか比べものにもなんない。橘可愛い過ぎ」

「かつ、かわっ……」

高原にとつては口癖なのだろうか、お姉さんと共にやたらとその単語を高原は連発していた。お姉さんの前では我慢が出来たけれども、さすがに俺にももう限界だった。

「おっ、男に対する言葉じゃない!!」

「そう？　じゃあ、綺麗」

ぱしっと、高原の手を払ってみせて。更にきつと睨む俺に、ふと真顔になって高原は言うのだ。

「皆が橘の魅力に気付いて夢中になっちゃったらどうしよう……周りに、敵だらけだよ俺」

言われた内容を理解する事をはなから放棄した俺は、高原を置いてすたすたと歩いて行く。

高原の家からの帰り道、もう家は近い。危ないから送って行くについて来てくれた高原は、どうせもうここでもいいと手前で断った処で、家の真ん前迄ついて来るのだ、いつもの如く。

……一気に風通しが良くなった首筋や耳元の違和感に戸惑いながら、俺は今日一日の事の次第を反芻する。

――晴れた日曜日。『姉貴がケーキ上手く作ったから来いって呼んでる』と高原に誘われた。内緒だけど朝五時頃から頑張ってたみたいだから来てやって、と駄目押しされ、さすがに断れずにやって来た。

前日から仕込んでいたと言う美味しいロールキャベツやハンバーグの昼食も振る舞われ、メインの手作りシフォンケーキも美味しく頂き、はなちゃんに癒されながらのんびりゆったりとした時間を過ごしていた。穏やかな楽しい話の流れに乗せる様に、そうしてお姉さんはどこか怪し気な笑みで言い出してきたのだ。

「橘くんはどれが好き？　一番、お元氣やんちゃボーイ風。二番、ミステリアスな無造作風。三番、ベーシックな大人風」

それは、何かの暗号なのか。理解出来ずにぽかんとする俺に、解説する様にお姉さんは続けた。

「ま、分かり易く言うと、一番はジャニーズ系、二番は韓国の若手俳優系、三番は正統派な普通の大人系、ってところね。どれがいい？」

「えっ……」

困って、つい助けを求めて高原に目を遣った。何だか高原もお姉さんと同じ様な悪戯っぽい笑みを浮かべている、俺はそこでふと不吉な思いにかられたのだ。そこでもっと警戒していれば――まあ、そんなのはいわゆる後の祭り、なのだけれど。

俺がどれとも答えを返さない内に、そうなる事は決まっていたらしかった。髪の毛切らせて、と突然にお姉さんは俺に迫り、そこで俺は、普段滅多に働く事のない直感が告げるのを感じていた。今言われた謎の三項目、あれは髪型を示したもののなのだと。

「まさなおもあたしも、断然一番でいきたいんだけど。絶対似合うって、保証するわ！！ でね、安心して、自慢じゃないけどあたし腕は確かだから。まさなおの髪の毛もあたしが切ってるの。分らないでしょ？ 女友達のも切ってるけど、みんな気に入ってたから次もお願いって言うてくれるの。苦情が出た事ないのよ。任せてもらって大丈夫！！」

自信たっぷりと言われて、器用そうな腕前を疑ってはいない俺は、唯一引つ掛かる部分だけに抵抗を示してみた。

「あの…… 出来れば三番の仕上がりにして貰えたら」

『お元氣やんちゃボーイジャニーズ風』が気になる俺を、お姉さんは根拠はなさそうな強さで一蹴してくれて。

「その人に似合う髪型を提案推奨してこそプロよ。キミに似合うのは断然ジャニーズ系なの！！ 二対一の時点でそれが現実だって事」

――お姉さんプロじゃないですよ、などと言う無粋なツッコミが許される空気ではなかった。逃げようとする俺の肩が、いつそこに回り込んできたのか高原の体にぶつかった。

ただにこにこと笑う高原は、俺を無理に押さえようとはしていない。逃げようと思えば逃げられた、のはこの時だ……なのに、それ以上を無理矢理に押し切られた訳でもなく、ただ強く断れないままに、俺は普段ははなちゃん的生活スペースである庭で椅子に座らされていたのだ。

高原が掲げる鏡を見ながらのお姉さんのカットは素早く手際が良く男前な程に潔く、予想以上に長めに切り落とされる髪の毛を俺は見つめ、啞然としてしまっていたのだが。

そういえば何だが、カットか洗髪の合い間にか、お姉さんに、うつとりした様な声で言われていた……

「橘くんの髪、やっぱり素敵。柔らかくて手に馴染む、いい感触。触りたいと思ってたのよね」。本当魅力的な髪質だわー。言われた事ない？」

そんな評価など受けた事はない、と思いかけて、正にいつい今も、言葉に成されないそんな評価を直ぐ隣のこの変わった相手から幾度となく受けてきていたと言う事に思い至った。髪が短い分、それをすぐ高原の手は何だか俺の頭を撫でる様に触れていた。親にすら幼い頃にもされた記憶は殆どない事を、ましてや同性に、それも今日だけでなく今迄に何回も、だ。

深く考える事をしなかったが、実は改めて考えるとそれって異様な光景なんだろうか、と考えがよぎる。考えれば考える程徐々に恥ずかしさは増し、俺は口を開いていた。

「あのっ、……明日さっ、臨時の図書委員会があるんだよねっ」

何でもいいから話題にしようとした目論見は、高原を真剣な表情にさせた。先程迄のふざけた空気をなくして、声音も低く高原は返してきた。

「そう、その事なんだけどね」

一度に重くなる空気に、俺は身構える。図書委員としての責任感の強さなのだろうか、俺は本来の高原の気質をそこに見る。こんな時なのにこういう真面目な高原を見ると安心して頼りになる、と感

心してしまつ。尊敬、と言うか。

そんな俺を静かに見返して、高原は続けた。

「最近、図書室内の書籍の盗難が疑われる被害が多発してるんだ。怪しい奴が出入りしてるのかも知れない」

それだけではないまいちぴんとこない俺に、高原は言を重ねた。

「窃盗犯の存在の確認は出来てない。もしかしてそんな奴等いなくて、出来の悪い委員メンバーがへまをして、書籍の紛失って形になつてるのかも知れない。真相は、全く手掛かりがないから分からないけど……」

俺の前では余りしない重い顔だ、相当頭を悩まされているらしい。今俺に何かが言える訳ではなく、そんな期待もしていない筈の高原は、呟く様に続けた。

「何だか嫌な予感がするんだ。不吉な感じ。橘、明後日当番でしょ。本当に気を付けてね。何だったら俺、その日一緒に当番に入るけど」

「いやっ、それはいい!!」

慌てて、俺は否定した。子供みたいに守って貰ってばかりな状況に、本気で恥ずかしさを覚えて、さすがの俺も折れなかった。

「要らない、大丈夫だから。机の下に緊急ボタンがあるんだろ？ それ押したら直ぐに誰か来てくれるんだろ？ じゃあ平気だから」

「でもさ橘、それ押す前に」

「明日っ、そういう話し合いっ!! 皆でするんだろ？ それ以降にその話、しよう。今言われてもよく分からないから……」

迫る様な高原を止めたくて、仕切る様に俺は言葉を投げていた。

何故だか必死になっていたらしい自分に気付いた様に、高原が近付いていた俺から身を離れた。

伏せた目で高原を視界の隅に見る俺を見つめて、高原がしみじみとした声で告げた。

「橘、強くなつたね……。口数が増えただけじゃなくて、ちゃんと自己主張が出来てる」

咎められたのかと思って、俺は何も返せなかった。くすりと笑っ

て、高原は言を繋いだ。

「って、褒めてんだよ。何かさ俺、知らない内に自立しちゃった息子を見た気分」

「なっ……何それ」

余りに理解し難い例えに、つい口走っていた。くすりと一つ笑いをこぼして、高原が俺の向こうに目を遣った。

「そんな事言ってる間に着いちゃったね。近いね橘の家」

言われて振り向くと、もう俺の家の真ん前なのだった。じゃあまた明日、委員会だね、と呆気ない程あっさり高原はきびすを返そうとするー何がそうさせたのか、俺は咄嗟に手を伸ばしていた。

ぐいつと服の裾を引っ張られた感触に気付いたのだろう、帰りかけていた高原の足が止まる。相手が振り返るより先に、俺は言葉を投げていた。

「送ってくれるの有り難いんだけど、高原は大丈夫なの？ こないだの四人組とか……危険な事ないの？」

振り向いた高原にじいつと見つめられて、高原の強さがあれば心配する必要などなかったのか、と俺は自分の浅はかさに恥ずかしくなってしまった。慌てて掴んでしまっていた服から手を離し、俺は誤魔化す様に小さな呟きを重ねる。

「だっ、大丈夫、みたいだねっ。ごめん、おかしい事言っで……じゃっ、またあし」

言い掛けた途中で、久々の抱擁を受けてしまった。ぎゅつと俺を自分の腕に包んだ高原は、暴れようとする俺を制する様に力を込めて、暫くの間そうしていた。抵抗しない方が却って早く解放してくれるかも、そう思っで力を抜いた俺を、けれどもなかなか高原は離してはくれなくて。結局俺の方から高原、と非難する様に声を張っていた。

やっと、体が離された。真っ赤な顔を自覚している俺は、高原に顔を見られたくなくて俯いている。無理に俺の顔を挙げさせようとはせずに居てくれて、高原のどこか熱を帯びた様な声が囁いた。

「そんなの心配してくれてたんだ……嬉しいな。橘ってさ、無意識にだらうけど俺の嬉しいツボくすぐってくれちゃうよね。ぴったしの所をね」

どんな意味の言葉に捉えればよいのか分からない俺は、黙っている。もうないとは思いながらも、高原の手が届かない位置に距離を置いて。

最後に伸びた手が、俺の頭をぽんぽんと叩いてきた。

「有難う。気を付けて帰るね。帰りたくないけど……。また、明日ね。おやすみ」

まだ顔を挙げられない俺の視界から、高原が消えた。おやすみつ、と叫ぶ様に一言残し、逃げる様にドアを開けて家の中に飛び込む、そうしてドアにもたれたままに俺は、ときどきする胸元に強く拳を当てている――高原の一言一言が、行動の一つ一つが、俺を無性に昂ぶらせる……

今迄の高原のあらゆる言動が頭を巡る。普通、どんな仲の良い親友にだって、頭はともかく頬に手を触れたりはいしないだろう。ましてや抱き締めたりなんか、まずしない。『可愛いものフェチ』と言う言い方を信じたとしても、その範囲は超えている。

他にも、俺を見つめる眼差しにしても、俺の言葉に嬉しがる過剰な反応にしても、「守る」と告げた時の真剣な言葉と表情や、普段から大事なものに触れる様に慎重で優しい接し方や……

さすがにここ迄くれば自覚せざるを得ない、高原の俺への気持ち。恐らく親愛の粹を越えた想い。異性に対するのと同じ様に好かれている、らしい。

――嫌な気分にならない自分に、戸惑っている。受け入れる気はないけれども、こちらから高原への憧れや尊敬、感謝といった気持ちがあるからか、そこ迄に拒絶したい気は自分には起こらないのだ。今の時点では。

――けれども、その夜に送ってこられたメールに対する返事を、俺はどうやっても送る事が出来なかったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6495y/>

ココロノヤミヲトカスヒト

2011年11月23日06時55分発行